

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2011・3・31

第32号



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1
TEL (0980) 82-6191

目次

第27回竹富町史編集委員会……………	1
業務日誌―町史編集室の動向―……………	4
（寄稿）鳩間島プール（豊年祭）の構造的意味……………加治工 真市……………	8
（文化財探訪）24 西表島東部の魚垣……………	14
（聖地めぐり）26 阿幸侯御嶽……………	15
（写真にみるわが町）27 舟漕儀礼のあるシイシイン（節祭）……………	16
（記念碑を訪ねて）7 米軍五〇三空挺部隊工兵隊道路改修記念碑……………	17
（新聞で知る町の今昔）18 水不足に愛のプレゼント……………	18
収蔵図書一覧……………	20
竹富町史の刊行物……………	23
編集後記・奥付……………	26

●表紙の写真●

竹富島―石垣島間を航海していた船舶は、白黒闘争の激しい政治の季節を反映して昭和30年代には新和丸と若竹丸がいた。当時は、まだ港湾が未整備で竹富島に入港した定期船は、干潮の時には沖どまりを余儀なくされた。写真は若竹丸が入港した時の様子。浅瀬のため碇を肩に担いで降ろしに行く、船員の苦労は尽きない。過去の港湾、定期船を知る貴重な写真である。

第二十七回 竹富町史編集委員会

―委員十七人に委嘱状交付・島じま―

編集捗状況の確認―

第二十七回竹富町史編集委員会は、平成二十三年二月二十五日(金)午前十時より、竹富町役場二階委員会会議室にて、次の日程で開催された。

一 委嘱状交付式

(一) 委嘱交付

(二) 教育委員会総務課長の挨拶(西原章恵)

二 第二十七回竹富町史編集委員会

(一) 編集委員長、副委員長の選出

(二) 竹富町史編集委員長あいさつ

(三) 経過報告(事務局)

三 議題

① 「島じま編」各島進捗状況の報告

② その他

出席者は編集委員十五人(欠席者二人)、当局より四人。

町史編集委員会に先立ち、編集委員の任期

満了に伴い、次の十七人に委嘱状(平成二十三年二月一日から二年間)が交付された(五十音順、◎は委員長、○は副委員長)。

阿佐伊孫良(竹富町老人クラブ連合会会長)

新本 光孝(琉球大学名誉教授)

石垣 金星(西表をほりおこす会会長)

石垣 久雄(石垣市文化協会副会長)

上江洲儀正(南山舎代表取締役社長)

大城 肇(琉球大学副学長)

黒島 精耕(元竹富町教育委員会教育長)

里井 洋一(琉球大学教育学部教授)

玉城 功一(元八重山商工高校教諭)

當山 善堂(元八重山支庁長)

◎登野原 武(元竹富町教育委員会教育長)

○西里 喜行(琉球大学名誉教授)

坂座真 武(元白保中学校教諭)

花井 正光(琉球大学教授)

本田 昭正(元那覇高校教諭)

三木 健(元琉球新報副社長)

吉川 安一(名桜大学国際学部教授)

町長・副町長・教育長のため、教育委員会

総務課長(町史編集事業担当課長)・西原章

恵より編集委員各位に委嘱状が手渡された。引き続き、西原章恵より「町史編集事業が計画通り完遂できるよう、編集委員の先生方にはお力添えをいただきたい」とのあいさつがあった。

第二十七回竹富町史編集委員会開催に当たり、新期役員が決定した。互選により委員長に登野原武氏が選出され、委員長の指名により副委員長に西里喜行氏が留任することが決まった。

登野原委員長は「歴史を記録するには大きな責任を伴います。社会の経過、変遷を正しく記録しなければなりません。自信と誇りをもって町史を立派に仕上げてほしい」とあいさつした。西里副委員長は「委員長と一蓮托生でがんばっていききたい」と抱負を述べた。今回の大きな議題は、町史編集事業の中核をなす、「島じま編」の進捗状況の報告である。各島からそれぞれ報告され、それらに対して活発な議論が行われた。

議題①「島じま編」各島進捗状況の報告

「島じま編」の進捗状況について、平成二十

二年度に開催の各島専門部会や学習会の内容も含めて、各島の専門部会長により報告された。

竹富島 竹富島専門部会長・石垣久雄氏は、

「竹富島編」は平成二十一年度に発刊の予定だったが、章立てに再構成の必要があったこと、重複箇所の検討、内容確認のため、編集作業が遅れていることを報告した。現在、版下を制中であり、発刊まであと一歩という段階にあることを述べた。編集作業の実感、原稿の提出までは三分の一にすぎず、残りは校正が三分の一、編集が三分の一であるとのことと理解しないと、前轍を踏むことになることを戒めた。

小浜島 小浜島編専門部会長・新本光孝氏から「小浜島編」の進捗状況報告があった。約九割の原稿をデータ入力済み、一部ゲラが戻ってきており、執筆者が校正と内容の確認をしているところである。発刊に向けて、万全を期して編集作業に取り組む旨が述べられた。

黒島 黒島編専門部会長・坂座真武氏から、黒島は今年度執筆に当たっており、十二月二

七日を締切り日と定めたが、原稿が集まらず、発刊計画の見直しを考えた、との申し出があった。

新城島 新城島専門部会委員・上江洲儀正氏より「新城島編」の進捗状況の報告があった。

新城島編の原稿は、登野原武氏の土地島についてのもを中心に集まりつつあることと、下地島については野底宗吉氏からの聞き書きを進めていることが報告された。平成二十三年度は筆耕の年度であるので、気を引き締めて取り組む決意が発表された。

鳩間島 鳩間島編専門部会長・吉川安一氏より「鳩間島編」の状況が報告された。九月の専門部会で、年度ごとの計画が立てられ、既に第二章「自然」の原稿が提出されていることを述べ、予定通り編集作業を進めていく展望を示した。

波照間島 波照間島編専門部会長・玉城功一氏より報告があった。十二月の専門部会ではとんどの執筆担当が決められたが、残った教育分野の執筆者と協力者について、一月に改めて話し合いを持ち決定したことが述べられた。これにより執筆者と頁数が確定し、作業が進展することの手ごたえを述べた。

西表島 西表島編専門部会長・石垣金星氏より「西表島編」の報告がなされた。原稿の締切日を早めに設定し、今年度十二月としたが、一年順延し十二月十三日としたことが述べられた。進捗状況と同時に、地球研の約二万点の資料が竹富町教育委員会に寄贈されたこと、西表島の炭坑についての事業が進んでいることとの報告があった。

議題②その他

その他について、(一)発刊計画の見直しについて、(二)自然編について、(三)社会教育について、などが新たに議題として挙がった。

(一)発刊計画の見直しについて

黒島編の報告により、平成二十三年度予定していた黒島編の発刊はなくなったので、平成二十三年度以降の発刊計画の見直しが必要となった。議論の結果、黒島編の発刊は繰り下げられ、全体的な発刊計画は以下の表の通り改められた。

年 度	筆 耕 査	編 集	発 刊
平成21年度	小浜島	竹富島	竹富島
平成22年度	—	小浜島	小浜島
平成23年度	新城島	—	—
平成24年度	鳩間島	新城島	新城島
平成25年度	波照間島	鳩間島	鳩間島
平成26年度	西表島	波照間島	波照間島
平成27年度	黒島	西表島	西表島
平成28年度		黒島	黒島

年度別発刊計画（新）

るかという課題が浮上した。その課題を克服すべく、『竹富町史』『自然編』の発行が決定した。

第二十六回編集委員会では、「自然編」を

『竹富町史・別巻⑤』として位置づけし、亜熱帯性気候、石西礁湖、西表・石垣国立公園を三本柱とし、竹富町の大自然と多様性をアピールする編集を心がけることなど意見が出された。内容は自然科学的であり、「島しま編」を補充することを留意したものであることを念頭に置いて編集することが求められた。したがって、「島しま編」では、人のくらしとの関わりをなかで、人文科学的な自然へのアプローチから記録していくということが確認された。

新本氏からは「熱帯・亜熱帯的地理」「島嶼的特徴」「石西礁湖」「西表・石垣国立公園」「動物」「植物」を柱とする、竹富町の自然の特色を前面に押し出した、基本構想を提案していただいた。今後は専門部会が、構想案に基づきながら、検討を加えていく見通しである。

また、花井正光氏から、町史編集において、環境省自然環境局国立公園課保管文書が活用できるように、町史から申請して取り寄せる

ことの提案があった。これに対して申請資料を整え次第、当資料を請求することが承認された。

（三）社会教育について

小浜島編の社会教育の記述に際し、明治・大正期における家庭教育に関する資料がまったくないが、どのように執筆してよいのか、ほかの島ではどうなっているのか、助言を求める呼びかけがあった。

西里喜行氏は、限られた時間のなかで、ある資料を最大限に生かして記すことと、今しか聞くことのできないことを記録として残すことが求められることとして答えた。明治・大正期の具体的な状況を把握することは難しいが、新聞資料や現代からできるだけ遡って記録することを心がけることが大切である。

とりわけ、社会教育については、戦後、島の復興を支えてきた青年会、婦人会の活動を社会教育として採りあげてほしい旨、事務局から各島専門部会にお願いした。

（二）自然編について

なお、竹富島編については、第二十六回町史編集委員会の進捗状況報告により、平成二十一年度に版下制作、平成二十二年度に編集・発刊が予定されたことを断っておく。

第二十五回編集委員会で、「島しま編」で「自然」分野に触れるとき、他島との共通するところが大きく、どのようにして書き分け

平成二十二年度編集係の動向

—島じま編に関連することを中心に—

三月十九日(金) 南山舎と「竹富島編」版下契約。

四月二日(木) 八島印刷と「竹富町史だより」第三一号の印刷契約。

竹富町教職員新任研修に出席(於・石垣市商工会館)。

四月五日(月) 黒島精耕「人とくらし」(小浜島編) 入力作業

(↓四月六日)。

四月八日(木) 外山久太郎「保健・衛生」(小浜島編) 受理。

四月九日(金) 大工義紀氏より鳩間島のカツオ漁に関する映像資料の情報提供有り。

四月十二日(月) 琉球朝日放送(QAB)に町史所蔵の写真一葉を貸出し。

四月十九日(月) 新城島編「学習会開催」。

四月二三日(金) 沖縄県立博物館の与那嶺一子氏ほか二名、「八重山展」での協力要請のため来室。

四月二六日(月) 花城正美氏来室し、小浜島編提出原稿の内容確認。

四月二七日(火) 慶田城久氏来室し、小浜島編提出原稿の推敲。琉球朝日放送(QAB)の上間拡氏が創立記念写真展(六月開催)の件で来室。

五月六日(木) 宮里俊治「信仰と祭祀」(小浜島編)を受理。

五月十四日(金) 小浜島編専門部会開催(於・小浜島)。

五月十七日(月) 當山善堂氏来室し、黒島編「序章」の構成を立てる。

西里幸晴氏より竹富町青年会協議会の写真の寄贈。

五月十九日(水) 小浜島編筆耕料支払い業務(↓五月二七日)。

五月二〇日(火) 高嶺方祐氏来室し、原稿「竹富島の芸能」(竹富島編)の内容確認と校正。

職員飯田泰彦が、県地域史協議会に出席し、「竹富町史 第十巻資料編 近代5」の発刊についてを発表。

美崎運輸倉庫の整理。

五月三十一日(月) 島袋憲一「自然」(鳩間島編) 受理。

六月一日(火) 黒島編執筆者五十四名に「執筆要領」「黒島編構成と分担表」送付。

六月二四日(木) 花城正美「スポーツ大会」「妖怪」「子どもの遊び」(小浜島編)の改稿原稿を受理。入力作業(↓七月二日)。

七月八日(木) 小浜島編専門部会開催。後、懇親会(於・源南山舎の上江洲儀正・大森一也両氏による「竹富島編」版下制作の進捗状況報告。

七月二〇日(火) 臨時職員の上地みどりが初勤務。宮内氏より写真資料の寄贈あり。早稲田調査隊。

七月二八日(水) 石垣久雄・阿佐伊孫良両氏来室し、竹富島編

の進捗状況と内容確認。

七月三〇日(金) 黒島編専門部会開催。原稿締め切りを十二月

二十七日とする。

八月三日(火) 鳩間島編の執筆者各位に原稿執筆依頼送付。

小浜島編原稿の大仲康文氏「教育」第一、二、

三、四、五節入力済。

八月九日(月) 西表音源資料の寄贈あり。早稲田調査隊。

八月十七日(火) 黒島編の「自然」について、専門部会委員の

坂座真武氏・本成尚氏、執筆者の新本光孝氏の
三名によるミーティング。

南山舎の上江洲儀正・大森一也氏と編集作業
についての打ち合わせ。

八月十八日(水) 島袋憲一「自然」(鳩間島編)入力作業(↓九

月九日)。

八月十九日(木) 安里功「叙位叙勲受賞者について」他(新城

島編)入力済。

八月二〇日(金) 上勢頭同子氏と原稿「衣とくらし」喜宝院蒐

集館所蔵の衣(竹富島編)を読み合わせ。

登野原武「上地島の武士の館」他(新城島編)

入力済。

八月二一日(土) 内盛スミ氏と原稿「衣とくらし」(竹富島編)

を読み合わせ。

八月三一日(火) 慶田城久氏来室し、原稿「年中行事」(小浜島

編)の差し替え。

九月二日(木) 竹富町風景づくり事業(景観条例の制定に向

けて)について、建設課長補佐・東金嶺肇が
資料収集のため来室。

大盛哲雄「つなげた小学校草創期の頃」他(小

浜島編)入力済。

九月三日(金) 竹富島編専門部会開催。出席は石垣久雄、西里

喜行、阿佐伊孫良、狩俣恵一の専門部会委員四
名。

九月六日(月) 新本光孝氏来室し、小浜島編刊行までの日程

を打ち合わせ確認。

九月九日(木) 南山舎に小浜島編の一部をデータ入稿。

九月一〇日(金) 山田「小浜島の医療」(小浜島編)入力作業(↓

九月十三日)。

九月一四日(火) 登野原武「バナリの語源について」明和の大

津波の大惨事」他(新城島編)入力済。

九月一五日(水) 黒島精耕「序章」歴史と伝承(小浜島編)入力

九月一七日(金) 鳩間島編専門部会開催(於・琉球大学)。

加治工真市氏より「町史たより」第三二号原稿

「鳩間島プール(豊年祭)の構造的意味」を受理。

大仲康文「教育」第一、二、三節(小浜島編)入力

九月三〇日(木) 坂座真武・増田昭子両氏が来室し、黒島編の

構成、役割分担、日程の確認。

十月 四日(月) 宮里俊治氏来室し、原稿「信仰と祭祀」(小浜

島編)の差し替え。

十月 五日(火)

新本光孝氏来室し、小浜島編の原稿を全体的に確認し、写真の挿入や差し替え原稿などを検討する。

上盛氏来室し、原稿「人物」(小浜島編)の資料を提供し追補。

十月 六日(水)

加治工真市氏の『町史だより』第三二号原稿「鳩間島プール(豊年祭)の構造的意味」入力作業(→十月八日)。

十月 十三日(水)

與那國光子氏と原稿「食とくらし」祝儀不祝儀の食(竹富島編)を最終読み合わせ。
阿佐伊孫良氏の竹富島編改稿原稿のデータ差替え。

十月 十八日(月)

南山舎の大森一也氏と竹富島編刊行までの日程の確認。第三回目のデータ入稿。

黒島精耕「序章」(小浜島編)入力済。

十月 二〇日(火)

西表島専門部会長・石垣金星氏と西表島編の原稿締切を平成二十三年十二月とすることを確認。

十月 二七日(木)

竹富島編原稿「社会教育」の追補のため、阿佐伊孫良氏より聞き書き。

十一月 四日(木)

阿佐伊孫良氏来室し、竹富島編原稿の校正と内容確認。

十一月 五日(金)

石垣久雄氏来室し、原稿「社会教育」(竹富島

編)の校正と内容確認。

十一月 七日(日)

竹富町民運動会。

十一月 一二日(金)

新城島編専門部会開催。出席者は登野原武、野底宗吉、安里功、安里精善、上江洲儀正の専門部会委員五人。

黒島精耕「伝統文化」第二、三、四節(小浜島編)入力済。

十一月 一九日(金)

竹富町民俗芸能発表会。

十一月 二四日(水)

阿佐伊孫良氏「竹富島編」に挿入する写真を持参して来室。新本光孝氏が竹富町の島々の植生についての資料を提供。

十一月 二五日(木)

玉城功一「書評 竹富町史 第十巻 資料編 近代5」―波照間小治の空白埋める―入力。美崎運輸倉庫整理。

十二月 二日(木)

玉城功一「書評 『竹富町史 第十巻 資料編 近代5』―波照間小治の空白埋める―」が「八重山毎日新聞」に掲載。

十二月 三日(金)

南山舎と「小浜島編」版下制作の契約。

十二月 六日(月)

南山舎の大森一也氏と打ち合わせ。見出しの書体、数字、方言の表記などの基準を設定する。

十二月 七日(火)

石垣市教育委員会駐車場にある竹富町教育委員会のコンテナを撤去し美崎運輸倉庫へ移動。竹富島ゆがふ館より「青年会新聞」を借用しコピー(→十二月十日)。竹富島青年会の協力

により、青年会活動と歴代青年会会長の確認をする。

十二月 八日(水) 上盛・花城正美「民俗芸能」「食とくらし」(小浜島編) 入力作業(→十二月十五日)。

十二月一〇日(金) 竹富島の「青年会新聞」見出し一覽」作成。

十二月一七日(金) 波照間島編専門部会開催。

十二月二〇日(月) 南山舎へ竹富島編差し替え原稿をメール送信。

十二月二一日(火) 黒島編専門部会開催。

十二月二二日(水) 玉城功一氏来室し、波照間島編の進捗状況と進行表の確認。

十二月二四日(木) 宮良和美「民話」(黒島編) 受理。

竹富町風景づくり事業について、建設課へ資料提供。

一月 五日(水) 教育長室にて、波照間島編の教育分野についての内容確認と役割分担。玉城功一氏、慶田

盛安三教育長、西前津松一氏の三名が出席。

一月 七日(金) 登野原武委員長来室し、第二十七回町史編集委員会の打ち合わせ。

一月十三日(木) 小浜島編原稿データ整理(→一月十七日)。

一月十九日(水) 花城正美「小浜島のことわざ」(小浜島編) 入力作業(→一月二十一日)。

一月二四日(月) 花城正美氏の増補原稿(小浜島編) 受理。

一月二五日(水) 登野原委員長来室し、第二十七回町史編集委員会の打ち合わせ。

一月二七日(木) 新本光孝氏来室し、原稿「自然」(小浜島編)の脚注の確認。

二月一日(火) 波照間島編の教育分野についての執筆者打ち合わせ。出席は玉城功一、上里多一、嘉良寧、

西前津松市、仲底善章の五氏。

二月〇日(水) オキジムによるコピー機のメンテナンス。

大盛聰「技術」「娯楽としての狂言」(小浜島編) 入力(→二月三日)。

南山舎に小浜島編原稿を第一回目のデータ入稿。

二月四日(金) 黒島編原稿の加工「防火」受理。

建設課の草稿「風景づくり事業」(仮称)の校正。大盛永意「小浜島史」他(小浜島編)入力済。

二月七日(月) 小浜島編専門部会開催。

二月十二日(土) ヤマネコマラソン。

二月一七日(木) 南山舎の大森一也氏と日程などミーティング。

二月二二日(火) 宮里俊治「祭祀と信仰」(小浜島編)の増補原稿受理。

慶田盛久「年中行事」(小浜島編)の増補原稿受理。

玻璃座真武氏来室し、第二十七回編集委員会の打ち合わせ。

二月二五日(金) 第二十七回竹富町史編集委員会。編集委員十

七

三月 九日(水) 小浜島編専門部会開催。

鳩間島のプール（豊年祭）の構造的意味

沖縄県立芸術大学名誉教授

加治工 真市

はじめに

過疎の島鳩間島のプールが今年度の「日本の祭 十」に選定された。これはTBSの企画で、毎年全国各地から十箇所の祭祀行事を選定して全国放映するものだという。「鳩間島のプール」に関する詳細な研究資料は、琉球大学教授・大城學氏が一九七九、一九八〇（昭和五四、五五）年の調査結果に基づく優れた研究成果を『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』で発表しているの、祭祀の具体的内容については同書に譲り、ここでは祭祀の構造的



綱引に先立ち行われている五穀の授受

な意味について考察する。

鳩間島最大の行事

鳩間島は今でこそ人口五〇人余の厳しい過疎の島であるが、一九六〇（昭和三五）年頃までは人口約六〇〇人を擁する、自然と調和した伝統的農村文化の豊かな島であった。明治中期以降に沖縄本島の本部町からブーシン（帆船）によるカツオ漁業が導入、また糸満や奥武島、久高島からはサバニによるイカ釣り漁が導入されて、島人は一九六五（昭和四十）年頃まで半農半漁の生業に従事した。しかし、鳩間島には人頭税制以来、西表島北岸一帯の水田へ海を越えて通耕する三〇〇年余の歴史があったから、基本は農業中心の村落であったといえる。

現在のプールには往時の華やかさはないが、それは伝統的農村集落最大の年中行事であり、優れた文化遺産であることは間違いない。かつて古老たちは、「プールのために生きているのだ」とよく話していた。

祭祀とタブー

ところで、プールとは一体何であろうか。「慶来慶田城由来記」（『石垣市史叢書Ⅰ』収録）によると、「四月十五日頃から稲の穂が出て熟して、刈り取り、穂礼（ブーリイ、豊年祭）をする間は、男女とも磯下りをしない。（中略）穂が出て実になる時分、風雨はますます差し支えるので、磯下り、湊あさりなどすれば、雨

風は激しくなり、稲穂にさわり不熟となる。(略)とあり、プー
ル(豊年祭)を「穂礼」と表記している。そこに記された稲の収
穫までの諸々のタブーは、稲の成熟を祈願するための物忌みであ
ることが分かる。

これは一九六五(昭和四十)年頃まで鳩間島でも行われていた、
稲の出穂からスクマ(初穂祭り)に至るまでのタブーと酷似して
いる。鳩間島ではスクマの日までは慎み深く生活するよう強制さ
れたが、その日からは大声で話してよいとされ、三線や笛も鳴ら
し、銅鑼も打ち鳴らして歌い舞い、豊年祭のゾーラキ(奉納舞踊)
の練習をしてもよいことになっていた。こうして村人が楽しみに
していたプーラを迎えることになる。

琉球王国と鳩間島

『琉球国由来記』(一七一三年。王府編)によると、『稲大祭(六
月、公儀ヨリ日撰、拝み申。遊三日ノ事)右、神酒食育、相調、
伊是名里主所、並村ヲヒヤ・火ノ神御前へ、ノロ・掟神申請、御
祭り、ヲエカ人・サバクリ、御拝四ツ仕也』とあるから、プー
ルは琉球王国の国家行事に組み込まれた祭祀の一つであると考え
られる。米の生産が琉球王国の国家財政の基本であり、特に八重
山における稲作農村経営の成否が国家財政を左右したからである。
その農村の一つである鳩間村は、当時村落経営上、他の村落で
は考えられないような困窮に喘いでいた。その状況は史料から読
み取れる。

一七〇二(康熙四一)年の「参遣状(上巻)」51(石垣市史叢書
8)収録、数字は記事の通し番号)によると、鳩間島から提出さ
れた稲作増産のため必要な目差役設置の嘆願は却下されたことが
分かる。

ところが、「参遣状(上巻)」53の記事によると、「鳩間島は、
古見村の所管で、上納やいろいろの公務は古見村で勤めていた。
遠海の離島に在るのに、古見村と同じように公務を勤め、百姓は
疲れ困っているのに、与人・目差を任じてくたされたい」と訴え
た件について、「(別紙上申書の写しを差し遣わす)」とあり、保
榮茂親雲上、奥平親方から首里の御物奉行へ上申されたことが分
かる。

そして、「参遣状(上巻)」56の記事によると、「鳩間島は、①
以前、多人数の時には西表島鬚川村と一地頭持として鬚川村の与
人・目差が指導していた。②鬚川村の人口が減少したので、鳩間
村は古見地頭の所管になり、上納や公務は古見村で勤めるようにな
った。③鳩間島は古見村から六里余の海上にあり、往来はとく
に百姓の難儀になっている。④他の村からの婿取り、嫁取りをす
ることも一切なく、古見村へ渡って二、三十日も滞在することに
なり、途方に暮れる者もいる。⑤古見村で夫婦となり、鳩間島と
離れている者もいので、鳩間島はだんだん百姓が途絶え、衰えて
いく状態である。⑥幸いに一昨年黒島の保里村は地が狭く、同村
の百姓六十人余が移住を訴えてきたが、それが百人余になった。
⑦それで与人・目差を一人ずつ配していただき、上納や諸事を鳩

間島で一切行えば、百姓が繁昌すると思われる。⑧現状を気の毒におぼしめされて、これらの趣旨、よろしくお取りなしをお頼みいたします。以上。目差十六人 与人十六人 首里大屋子三人」等を僉議内容とする上申書が八重山の頭方、在番方から再度王府へ提出されたことが分かる。

その結果、一七〇二（康熙四一）年八月二十二日付けで御物奉行から申請通り認可された。以後、鳩間島には与人・目差が常駐することになり、その責任のもとに村行政が執行された。そういう政治状況のなかで、プールは『琉球国由来記』に位置づけられ、鳩間村最大の豊年祈願祭・感謝祭として執行されてきたと考えられるのである。

村落共同体のヒエラルヒー

鳩間島の伝統的村落共同体の自治組織は、村代表として選出されたスーダイ（総代）を頂点に、東支会（東村）と西支会（西村）からヤクサ（役人）が一人ずつ、計二人選出され、総代を補佐するする仕組みであった。ヤクサの下には、十四、十五歳の男児でザアタル（座敷係）とジンバイ（配膳係）が各一人、両支会より選出され、彼らが島のテクノクラートとして村の祭祀行政を仕切り、祭祀に要する一切の準備を調べて推進させた。そして彼らは村人から「シマムチ・ユームチ」（島持ち、世持ち）と尊称された。

彼らは、首里王府の聞得大君を頂点とする神女組織の末端組織

である、島々村々の神女（司）の命を受けて、村の祭祀・行政を執行した。島々の司は、王府の辞令書によって任命された、石垣島のホーラザーマイ（大阿母）へ伺候したから、王府の支配下にあったと考えられる。

島では司によって一年中の祭祀のビュール（日取り）案が提示されると、総代を通じてソングチバチズルイ（正月初の部落常会）にかけられ、一年中の祭祀の日程が決定された。後は月々の祭祀行事の日程に従って、総代以下のシマムチ・ユームチたちによる必要な供物の準備のもと、司やティジリビ（男性神職者）によって神事が執行されたのである。

それ故に豊年祭の歌、「バイミジラバ」や「ミチウタ」で、「鳩間村が豊年満作になったら、守り神を讃えよう。守り神の次には司や手擦り部の神職者を、神職者の次には島持ち世持ちを、島持ち世持ちの次には我等島人全員を讃えよう」と歌われるのである。この村落共同体のヒエラルヒーの頂点（守り神）は琉球王国の神女組織に組み込まれた末端組織であるから、豊年祭で歌い讃えられる対象は、聞得大君に収斂する。『琉球国由来記』に認定された鳩間島の御嶽は「友利御嶽」と「鬚川御嶽」のみであることの意味は後述する。

祭祀の構造

鳩間島のプールは、構造的に（一）ユードウシ（夜通し。夜を籠めて豊年感謝の祈願をする。オンプール）、（二）トーピン（祭り当日。

民衆による奉納芸競演とバーレー（爬龍船競漕）による豊年祈願、
（三）シナビキ（綱引き）による豊年祈願の三部から構成されている。
（一）は感謝祭、（二）（三）は予祝祈願祭である。これらは豊年祭の神
歌によって実証される。

（二）ではゾーラキ（入子型奉納芸）。「長者の大主」型芸能は構造
的に入子型構造。競演とバーレーの東村（男）と西村（女）対抗
競漕に基づく西村勝利で豊年を予祝し、（三）では東西対抗綱引きの
結果、西村勝利によって豊年が予祝されるという、祭祀構造が認
められる。それにしても（二）の競演、競漕による豊年祈願の各場
面において、二十曲もの異なる神歌が合唱奉納され、厳粛な祈願
が続けられているのは、鳩間島のプールの民俗宗教的色彩の濃い
古代の祭祀だからであろう。

神歌の表現にみるプール

（二）で競演されるゾーラキ（入子型奉納芸）に、西村の「弥勒踊
り」と東村の「かむる踊り」がある。私は、プールで歌われる神
歌群のなから、「ミルクウタ」（弥勒歌）、「カムラーマウタ」に
注目し、幾つかの特徴を指摘しながら、鳩間島のプールが琉球王
府の国家戦略に基づく沖縄の伝統的農村文化を濃縮して表現して
いることを実証したい。

ミルクウタについて

先ず弥勒踊りのミルクウタのなから、プールの起源について、
手掛かりとなる内部徴証を示す。

ダイククヌ ミルク
バガバトゥマニイ
モリ①

クトウシカラ バト
ウマ

ユンガフデムヌ②

ユンガフデムヌ

サンサン グー

ヤー③ サーサー

〔第1連〕

ケラス ダイタツシ

ウジガミヌ ジンク

④

ウヤヌ ダイタツシ

ハチヌウミンゲウ

〔第五連〕



島びとを従えての弥勒踊り

パトゥマカーヌ ミシヤ

イチマデインカワラス

ウリタユティ パトゥマ

ユンガフデムヌ (第九連)

ここで先ず気付くことは、歌詞が全体的に八八六調の沖縄本島方言で表出されていて、基本的に場間方言でないことである。

これは石垣島の「弥勒節」と同系統の歌であるから、石垣島から伝播した歌と推定される。石垣島の「弥勒節」は、離島各地へ伝えられたようで、各地に分布することから、それなりの政治的意図があったものと考えられる。

石垣島の「弥勒節」は大浜用倫が作ったので、一七九一(乾隆五六)年に用倫が黒島首里大屋子を拝命して首里王府へ上国した際に台風で安南国に漂着し、救助されて弥勒面と衣装を新調し、福州を経て琉球に安着した際に完成させたものという(喜舎場永珣『八重山民謡誌』参照)。大浜用倫は一七九三(乾隆五八)年に首里王府で馬役頭、一七九四(乾隆五九)年に大浜頭職拝命、一七九六(嘉慶元)年に福州で客死したという。喜舎場説に従えば、石垣島の「弥勒節」は最古の琉歌集『琉歌百控乾柔節流』(一七九五年)収録の「弥勒節」(弥勒代のむかし繰戻し今に御万人の間切遊ぶ嬉しや)より、二、三年早く成立したことになる。しかし八八六の琉歌調といい、沖縄方言による表出といい、「弥勒節」の成立については更に検討を要する。

また「琉球大歌集」(『南島歌謡大成』収録)の「弥勒フシ」には「赤田首里どのち金どろさげておれがあかれば弥勒御迎」の歌詞を所収している。この「赤田首里殿内」における「弥勒迎えの行事」が既に存在していたことや、赤田殿内には三〇〇年前から「求道長老」が祀られ「道ジュネーが行われている」(『沖縄大百科事典』)こと、「おもろさうし」にも「弥勒見ちへ和る 此の生まれど弥勒 此の御神酒ぬぎ上げわちへ 世はちよわれ」(巻七一三一)とあることも加えて検討しなければならないだろう。石垣島の「弥勒節」の作者を大浜用倫とすると、それは首里の弥勒信仰と琉歌の「弥勒節」からヒントを得、何らかの政治的意図をもって作られたものと考えざるを得ない。

次に場間島の「ミルクウタ」に目を転じると、(第一連)①の「イモリ」は命令形だから、「イモチ」の誤りで、ここは連用形(接続形)の「イモチ」でなければ歌意が論理的に展開しないことを知る。そして「弥勒踊り」は衆生をことごとく済度するという弥勒菩薩を「弥勒神」として形象化した芸能であるから、大國の弥勒菩薩が場間島の衆生済度のために「豊稷を齎す神」として来臨されるというプロットであることも分かる。これが豊年を予祝するのに最も相応しい形だからである。

場間島の友利御嶽は神仏混交であるから、それは弥勒神の設定とも符号する。ゾーラキ(奉納芸)という芸能語彙も神仏習合した御嶽信仰の実態から考えると、「常楽我浄」の「常楽」が転訛したものと考えられる。そう考えると、『琉球国由来記』に認定

された友利御嶽の神は、開得大君が琉球の神女を体系化した際に「大国（琉球王国）」から分配されたものと解釈することが出来る。このように解釈することによって、③の現象も合理的に説明できる。つまり、③の「グーヤ」の「グー」は、国語音韻史上室町時代に現れる連声現象の崩れたもので、本来は法則的に「ヌー」となるべきところ、おそらく直前の撥音「ン」が奥寄りの調音点を有していたことから、グーと音韻転訛したものであろう。十四世紀頃から十七世紀頃の音韻現象と推定される。連声現象については、因みに北谷掟宛辞令書（一五七七年）に「このちのいろいろのみなないは御ぬ（ゆ）るしめされ候」（高良倉吉著『琉球王国の構造』）とあり、十六世紀沖繩語に実在した音韻現象である。従って琉歌形式を踏襲した「弥勒節」にも当然予想される音韻現象である。

②の「ユンガフ」は、濁音の前の前鼻音化現象で、十六世紀の沖繩語（首里語）に存在したことがハングル資料で実証されている（多和田眞一郎著『沖繩語音韻の歴史的研究』参照）。④の「ジnk」を「甚句」と解すれば、七七七五調の「越後甚句」に繋がり、「神供」と解すれば「神への供え物」の義となつて古い時代に繋がる。ここでは「神供」の義と解する方が自然であろう。

鳩間島の「ミルクウタ」には⑤の「バトウマカー」も詠み込まれている。『近世八重山の民衆生活史』（得能壽美著）によると、

「乾隆十三（一七四八）年、且つ又用水不自由これ有り、船路岩里余差し越して汲み来候に付き村付近に井堀させ」（筆者訳）（憲

章姓家譜C）とある。脇筆者黒島仁屋から上申された公文書「諸筑登之座敷」のなかに、鳩間村の井戸を掘ったことが記述されており、黒島仁屋の末裔の人が西村井戸の祈願を担当してきたことから、「ミルクウタ」の伝来は一七四八年まで遡及可能と考えられる。

そう考えると大浜用倫作の「弥勒節」よりも四〇年以前に既に鳩間島に「弥勒節」が伝来していた可能性を否定することはできない。「弥勒節」の内部徴証を更に検討することによって「作者問題」の考察を深める必要がある。

また「参遺状（上巻）」56の記事によると、「鳩間島は、鬚川村の与人・目差が指導していたが、だんだん鬚川村の人が減少したので」（一七〇二（康熙四一）年）とあり、以後鬚川村は史料上からは消えていく。それと対照的に鳩間島の「鬚川御嶽」が『琉球国由来記』（一七一三年）に認定され、そのヤマニンズ（宗徒）が出現してくることから、鬚川御嶽のヤマニンズは鬚川村からの移住者を先祖に持つ人々であると考えられ、プールにおけるパーレー（爬竜舟競漕）の伝承儀礼とも係ってくると思われる。鳩間島の鬚川御嶽は西表島の鬚川御嶽から香炉の灰を貰つて建立したという伝承があり、それを運んできた様子がパーレーのユーアギ（豊年を引き寄せる神事）の儀礼に繋がっているという伝承もある。従って鳩間島のプールやパーレーの起源は、少なくとも一七一三年まで遡及させることが可能と思われる。

カムラーマウタについて

「ミルク踊り」と対をなす東村の「カムラーマ踊り」は、「ムロ（神漏）」に指小辞の「マ」が下接して形成された語であろうか。語源は「禿 无髪 加夫呂奈利」（『新撰字鏡』）と解され、「かむろき（神漏岐）」、「かむろみ（神漏美）」に繋がる言葉と解される。

鳩間島のカムラーマは「弥勒神」に対応する「かむろ神」で、茶褐色の棕櫚の繊維を頭に被り、同じく棕櫚の繊維を被った子供を多数引き連れて出現する子孫繁昌の神の舞と伝えられている。因みにカムラーマウタの第四連を示すと次の通りである。



子どもを引き連れたかむろ踊り

カムラーマヌ アマイヤ
ヌーフサティル アマイル
カムラーマヌ アマイヤ
アカカラジ フサティル アマイル
カムラーマヌ アマイヤ
ウヤキユーバ タボラリ

右のカムラーマ歌第四連は「カムラーマの神遊び（歓え（アマエ）は、何が欲しくて神遊びする（歓え）のか、カムラーマの神遊び（歓え（アマエ）は、民草（百姓）が欲しくて神遊びする（歓え）の」だ、カムラーマの神遊び（歓え（アマエ）は、豊年満作の世（年）を賜ることです」と演唱されており、カムラーマを神格と解することによって、その主題が弥勒歌の主題と見事に対応することを知るのである。

結びとして

以上の観点から、村人の立場からは村落の豊穡と子孫繁栄の祈願が豊年祭の主題であり、開得大君の観点からは庶民を常楽我浄へ導き、併せて王国の繁栄を予祝する仕掛けとしての豊年祭が主題であったと解釈することができると思う。



西表島東部のカサ崎の魚垣

《文化財探訪》24

西表島東部の魚垣

西表島東部の仲間崎から古見、カサ崎、由布、野原崎、北部の高那、ユツン川、ニシ崎に至る海域には昔ながらの魚垣が二十余カ所ほど残っている。魚垣と書いて一般的に「ながき」と読まれる。魚垣は別名、石干見（いしひみ）とも言い、原始的な漁法のひとつ。魚垣をカチ、カキイ、ハシイ、クミという地域もある。

また、宗教や支配者とのつながりもあり、ノ口垣、アジ垣といったものもあった。沖縄には世界でも最大級といわれる魚垣が小浜島にあり、島本魚垣（シマンダカキイ）と呼ばれている。垣の長さ一二〇〇メートル、幅一二メートルの大規模なものだったようだ。

魚垣は遠浅の海岸を利用して海に石垣を囲いめぐらし、潮の干満を利用して魚をとる漁法。太古に南方より伝わったこの漁は、自然と密着にかかわった先人の知恵だ。

八重山の魚垣の構造は、垣の中央部に口を開け、魚群が入ったらその口を網でふさぐ。これをフチイカキイ（口垣）といった。また、潮の干満を最大限に利用するために小潮時用のもの（内垣）は海岸近くに、大潮時用のもの（外垣）は沖の方にと工夫が凝らされていた。そのほとんどが、湾か入り江になっている河口近くに多く、海岸から沖の方に仕切るように蛇行して延びていた。

西表島の魚垣の所有者は、鳩間島、竹富島、黒島、新城島などの島民が多く、同島で稲作通耕していた。稲作づくりは昭和五〇年まで行われ、魚垣は稲作の期間、作業の合間に潮時を見て、食料の魚を捕獲する施設として、水田の近くの遠浅の干潟に造られたようである。しかし、今ではほとんど使われなくなった。写真の魚垣は後良川河口、カサ崎から沖に伸びていて、一帯は永遠と浅瀬になった遠浅が広がる。遠くに小浜島を臨むことができる。

阿幸俣御嶽



波照間島のピテヌワのひとつ阿幸俣御嶽

御嶽が豚になりかねない。

波照間島は、久高島と同様に「神の島」と呼ばれることがある。祭祀行事が多いことのほか、集落に潜む神秘的な島の雰囲気にも共通性があるからだろうか。「島は農業を一本の軸として営まれるとともに、祭祀をもう一本の軸としている」と表現される。島を歩いてみると、大木の根っこ、大石の近くには香炉が置かれ、祈願の形跡が見られる。

八重山は群雄割拠の時代（十五世紀中期～後期）、島じまに英雄がおり、勢力を競っていた。

『琉球国由来記』によると、波照間島を拠点に勢力を誇示していたのが明宇底獅子嘉殿（ミウスクシカドン）だった。オヤケアカハチの乱の時、琉球王府に味方したため、アカハチの手下によつて殺害されてしまうが、王府は三人の息子を島の最高役人、三人の女子は女頭に任命した。

〔前略〕上聞二御憐ミニ子供六人御召寄、兄赤マヤハ、屋安コ与人、二男コマヤハ、新本与三人、三男ヲトウハ、カイシモル与人、女子、カマタ・ホコヤ・コヤ、三人ハ、女頭二御召成サル。（中略）折節、カマタ・ホコヤ・コヤニ、右嶽々ノ御神、御託宣ニ、汝等守護ノタメ、天降ノヨシ、アリケレバ、彼与人共ヲ始メ、其外之人人、謹而体拝シ、御嶽ヲ崇敬仕リ今迄有来ル由ナリ」と『琉球国由来記』にその記述がある。

阿幸俣御嶽を拝み始めたのが、三男のカイシモル与人を拝命されたヲトウである。由来記には「此嶽、カイシモル与、拝み始ルト也」とある。御嶽は、島で最も神高いとされる真徳利、白郎原とともにピテヌワ（畑の御嶽）と呼ばれる。島にはピテヌワに対応する御嶽がある。ウツチヌワ（内（部落）の御嶽）である。阿幸俣御嶽はウツチヌワである大城御嶽、大石御嶽の本御嶽で、大城・大石に両御嶽は神通しの遥拝御嶽の性格を有している。

琉球の公事御嶽を記した『琉球国由来記』二十一巻によると、神名は嶽名と同じ。御イベ名はヲタイシカイヲヤン。島は土地改良事業が進んでいるために、上空から眺望すると、森林が一面に広がっている場所が御嶽である。

阿幸俣御嶽は、ほかの二御嶽と同様に鳥居、拝殿、香炉はなく神体があるだけである。祭祀では線香は立てず、ニンニク、塩、神酒が供えられるだけである。このようにみると原初的な形態をとどめている御嶽のようである。

三つ御嶽への入域は厳格で、通常は禁止されている。入れるのは年三回のミヨウクツエーに限られる。真徳利御嶽には岩石が地下に割れた底にある地底湖、白郎原の御嶽には巨大な鍾乳洞があるが、阿幸俣御嶽はただ天空を突く樹木に覆われた森林が広がっているだけである。

沖縄全域の御嶽を記した『琉球国由来記』二十一巻に掲載されている波照間島の御嶽である。島では「アバティワ」と呼ぶ。御嶽は「オタケ」「ウタキ」などと読まれるが、八重山では「ウガン」「オン」が一般的な呼称である。

波照間島では御嶽のことを「ワー」という。島では似たような方言に「ウワー」がある。意味は豚。微妙な違いだが、明確に発音しないと、



北・南の両部落のハーリー漕手のケーラでの祈り

《写真に見るわが町》 27

舟漕ぎ儀式のあるシイシン（節祭）

八重山のシツ（節祭）は伝統的な農耕暦に基づいて行われる年替わりの年中行事を指す。西表島の祖納・干立（国の重要無形民俗文化財）として船浮、新城島、波照間島では舟漕ぎ儀式のある祭祀として、今までも行われている。波照間島のシイシン（節祭）は戊戌（つちのえ・いぬ）または己亥（つちのと・い）から四日間、行われる。その間、畑地を耕してならず、畑仕事は休む。

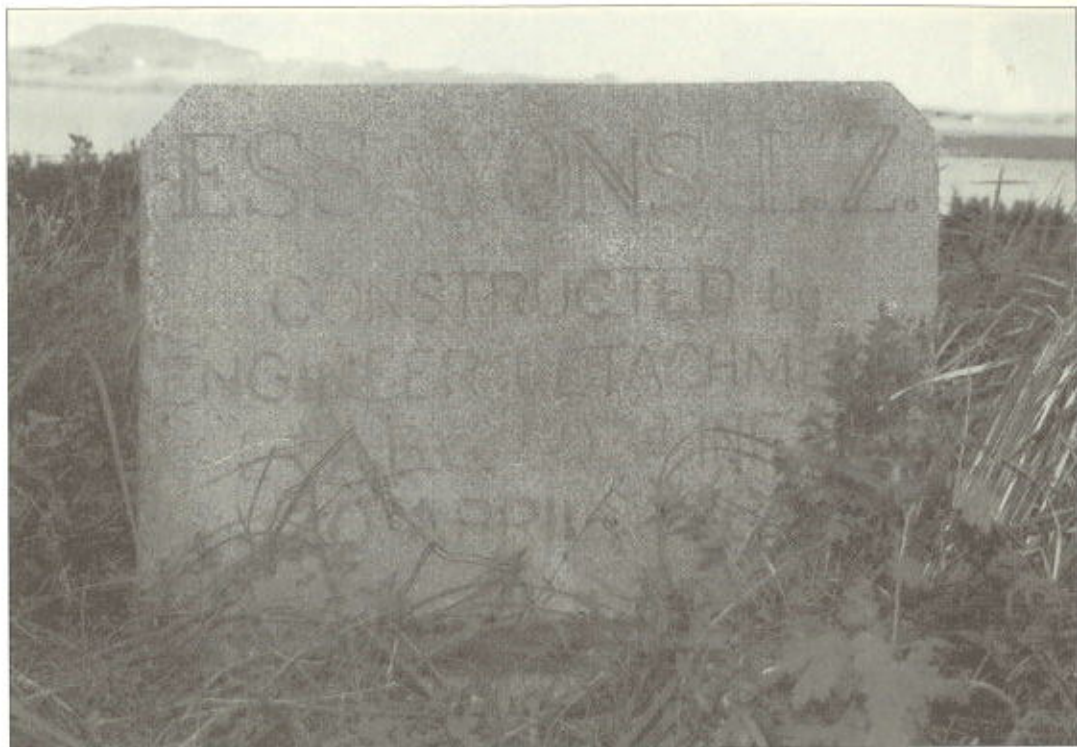
祭りの初日は、御嶽の聖なる井戸から汲んだ水でブザシイケー（床の間）の用具を洗い、花入れに新しいススキの葉をいける。香炉には新しい灰を入れるなど、徹底した掃除が施され洗い磨かれる。

二日目はミザミルビイン（水浴びる日）で、大人も子供も御嶽の井戸から汲んだ聖なるバガミジイ（若水）で体を洗い、家をきれいに掃き清める。その後、イバツ（おにぎり）三個をブザシイケー（床の間）の飾り、祖先にお供えしてから食べる。

三日目は祝祭のクライマックスでユニニゲー（世願い）と称され、舟漕ぎの行事がある。三隻の舟が参加し、それぞれ旗持ちの保多盛（富盛、親盛（前、名石）東迎（北、南）に指揮された漕ぎ手が乗り込む。漕ぎ手は（一五歳）五〇歳フダニンの中から選ばれ、ブナバリという所から取った、海浜の植物（カヤブルマミ）を持って御嶽に持参。そして、それを頭や腰に巻きつけ、さらにスパー（鉢巻）を締め、舟の艦とオモテにもつける。

漕ぎ手はシイシンを行う浜に集まり、簡単な儀式をした後、舟を海に浮かべ、浜と沖との間を九回の往復をする。その後、イナマの浜まで漕いで行く。浜の小高い丘ではイナマの神司の指示のもと、島の役員らがすでに集まっていた、三隻の舟の競漕を見守っている。ここでも再度決まった海点までの往復を九回繰り返す。想定されているのは海に向かうからユー（祝福）を持ち帰ることである。

四日目は「デー」と称して、各家庭でイバツを三個お供えして祈願する。このようにして、シイシンは終了する。



西表島の野原崎にある米軍演習の記念碑

《記念碑を訪ねて》 7

米軍五〇三空挺部隊工兵隊道路改修記念碑

西表島北東部の野原地区の県道二〇五線拡張工事現場に古びたコンクリート作りの石碑が現れた。隠していた草むらが道路工事で取り除かれたため、姿を現した。当時の新聞報道などと照らし合わせると、一九六二年（昭和三七）四月から五月にかけて西表島東部で演習をした米軍五〇三空挺部隊工兵隊（部隊長・プリンデル少佐）が、演習の一環として延長十六キロのオグデン道路（仲間―野原間）を改修したのを記念して米軍が建立したのだった。

当時の新聞報道によると米軍は、轍（わだち）が酷かった道路を改修し、古見小学校の運動場拡張工事も実施。スポーツ用具の提供、映画会なども行った。古見集落で米琉親善陸上競技大会、感謝会も催され、竹富町も感謝状を贈呈した。本原実助役（当時）は「秋の演習には船浦線補修にもぜひ協力してもらおうようお願いする。西表開発は米政府の援助がなければならぬ。浦内の方でも大規模な演習をしてもらって、浦内川の橋を改修してもらおう希望する。地元民は演習を歓迎している」と述べている（八重山タイムス／一九六二・五・一六）。

プリンデル部隊長は「自分らはジャングル演習をするだけで、別に西表島を軍事基地にする考えはない」と言明し、関係者をほつとさせた。米軍に頼らざるを得なかった、当時の島の厳しさを物語る史跡である。石碑はタテ約五〇センチ、ヨコ約八〇センチの大きさ。表面には「ESSAYONS L・Z」の文字が横書きで書き込まれている。文面から「工兵隊」が建てたであろうことが何となく窺える。文章の末尾には「20・APRIL・1962」が掘り込まれている。東方に小浜島が眺望できる。

水不足に愛のプレゼント

竹富町の島々では一九六二年（昭和三七）半ばから翌六三年（同三八）九月頃までの約一年間にわたって大干ばつが続き、住民の生活を圧迫、干ばつに悩む住民の暮らしが連日、新聞上で報道された。水飢饉は島で暮らす人々を直撃した。

新聞各紙は一九六二年（同三七）七月、干ばつに悩む波照間島の実情を報道した。六十年ぶりの大干ばつが続いて、畑地の農作物も枯死状態にあるとレポートし、島の「今」を伝えた。これは、他の島も同様である。黒島ではサトウキビ、畜産が打撃を受けた。鳩間島では農作物が枯死の状態にあるとともに、飲料水に事欠き西表島からの水運びで急場を凌いでいる。これは新城島も同じだった。

黒島では地下水を求めてボーリング調査が行われたが、生活用水に適した水は出てこなかった。新聞には「水キキンの黒島」「牛千頭餓死寸前」「黒島の牛次々と死ぬ」「枯死寸前の離島の人々」などの見出しが打ち出されている。行政機関は島々の干害調査を行って水事情の把握に努め、救済物資を送

るなどの渇水対策に乗り出した。

どの島も異常渇水で疲弊したが、石垣島の人々は水飢饉の解消に向けて「愛の手」を差し延べた。特に学校では生徒会が中心になり動き始めた。大浜中学校から黒島中学校へ、白保中学校から波照間中学校へ「愛のプレゼント」の飲料水が贈られた。

新聞記事（八重山毎日新聞／昭和三八・五・二五）は「黒島へ水を一大中生徒会が」の見出しで、黒島中について「七十数年ぶりの長期異常干ばつで水飢饉に悩む竹富町黒島へ水を送ろう」という運動が大浜中学校（桃原用永校長）の生徒会で取り上げられ、明るい話題を巻いている」と記事にしている。

そのうえで、生徒会の動きについて「同校生徒会（山城直盛会長、六一〇名）では去る十一日、水飢饉に悩む黒島の人々に生徒一人当たりビール瓶三本の水と、一セント（水の運搬費）を送ることを決め、昨日全生徒がビール瓶三本の水を出し合い、ここ二、三日中に現地へ瓶を送ることになった」と綴っている。

一方、波照間中では「波照間中へ水送一離島お友達救おう」の見出しで、新聞記事（八重山タイムス／昭和三八・五・一九）は「水不足問題は益々深刻を極め、特

に離島が窮している。このような水不足のもとで、学校給食や生活の飲料水はどうなっているのか、と心配して愛の給水をした中学校があり、関係者から感謝されている」の記事を打ち出している。感謝を受けている学校は、波照間島と親島・子島（ウヤジマ・ファジマ）の関係が深い、石垣島の白保にある白保中学校で、救い手を差し延べている。

記事は「白保中学校（石垣信良校長）の生徒会（東内原盛会長）は十七日、三合詰め瓶千五百五十本に飲料水、約三石五斗を詰め送った。同生徒会では二三〇人の生徒が、一人五本の三合瓶の水を持ち寄り、波照間校に送ることを決めた。そして陸上運送費は、同校と日新パンが負担。海上輸送は波照間への定期船・八島丸が無償で奉仕運搬、リレーした」と書き連ねる。

新聞には、このほか「黒島に愛に飲料水」「海を渡った愛の水」など見出しがある。島に住む人々は心温まるプレゼントに喜び、明日への活力を漲らせた。大干ばつの水飢饉は一九六三年（昭和三八）九月、八重山を襲った台風十四号グロリアが慈雨もたらし、解消した。しかし、その代償は大きく、島じまに大きい台風の爪痕は残した。

平成22年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

受贈図書（発行年・著書）	寄贈者芳名
あしびなあ 一宮古島市研修特集号— 第21号（2010号・沖縄県地域史協議会）	沖縄県地域史協議会
ある医介輔の記録（2010年・親盛長明）	親盛ヨシ子
石垣市考古ビジュアル版6 八重山の民間交易隆盛期 中森期—中国陶磁器・人口の急増—（2010年・石垣市）	石垣市総務部市史編集課
石垣市史叢書17 万書付集 上巻（2010年・石垣市総務部市史編集課）	石垣市総務部市史編集課
いひちやめ踊い—終戦直後の芸能—（パンフレット）（平成18年・うるま市教育委員会）	うるま市教育委員会
移民関係映像のテキスト化資料 —沖縄テレビ放送株式会社制作「沖縄発われら地球人」と「世界ウチナーンチュ紀行」のテキスト化資料— 平成18年度琉球大学移民研究センタープロジェクト「移民関係映像資料の利活用に関する基礎的研究」資料（2010年・町田宗博編）	琉球大学国際沖縄研究所 移民研究部門（旧移民研究センター）
移民研究 第6号（2010年・移民研究編集委員）	琉球大学国際沖縄研究所 移民研究部門
西表島・宇多良炭坑 萬骨碑 建立記念誌（2010年・三木健編）	三木 健
うるま市立資料館年報・紀要 平成19年度—石川歴史民俗資料館・海の文化資料館—（2008年・うるま市教育委員会）	うるま市教育委員会
うるま市立資料館年報 平成17・18年度—石川歴史民俗資料館・与那城歴史民俗資料館・海の文化資料館—（2007年・うるま市立資料館）	うるま市立資料館
うるま市立資料館年報・紀要 平成20年度 —石川歴史民俗資料館・与那城歴史民俗資料館・海の文化資料館—（2010年・うるま市立資料館）	うるま市教育委員会
笑の泣き笑い物語（2000年・宮良笑）	大石直樹
沖縄研究資料27 旧記書類抜粋 沖縄旧記書類字句注解書（2010年・法政大学沖縄文化研究所）	法政大学沖縄文化研究所
沖縄研究ノート19（2010年・宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所）	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所
沖縄県史 各論編3 古琉球（2010年・財団法人沖縄文化振興会史料編集室）	財団法人沖縄文化振興会 史料編集室
沖縄県史だより 第19号（2010年・財団法人沖縄文化振興会史料編集室）	財団法人沖縄文化振興会 史料編集室
沖縄県地域史協議会会誌 第33号（2010年・沖縄県地域史協議会）	沖縄県地域史協議会
沖縄県ハンセン病証言集資料編（2006年・沖縄県ハンセン病証言集編集総務局編）	沖縄愛楽園自治会
沖縄国際大学校友会校友会報第5号（2010年・沖縄国際大学校友会）	沖縄国際大学校友会
沖縄の印部石（2009年・沖縄県地域史協議会）	沖縄県地域史協議会
沖縄文化研究第36号（2010年・法政大学沖縄文化研究所）	法政大学沖縄文化研究所

恩納村誌編さん室だより (第6号-第11号) 平成21年度 (2010年5月30日)	恩納村誌編さん室
北中城村史第4巻「戦争・証言編1」「戦争・証言編2」「戦争・論述編」(2010年・北中城村史編纂委員会)	北中城村役場
宜野座村の文化財集 (2) —芸能まつり・交通交易・商業製造業・建築・古木— (2010年・宜野座村教育委員会)	宜野座村教育委員会
記録されなかったムラの記憶—西表島旧稲葉集落の聞き書き— (2010年・松村正治編)	松村正治
金武町の歴史と文化 第4集 町内埋蔵文化財予備調査報告書 億首川周辺 平成18 -	
黒島の自然と民俗 (2006年・特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会)	黒島研究所
研究実践報告書 平成22年度 (2011年・竹富町学力向上対策委員会)	竹富町教育委員会
古謡にみる竹富島の生活環境史 (2009年・特定非営利活動法人たきどうん)	特定非営利活動法人たきどうん
首里城研究 —特集・御後絵の復元— №12 (2010年・首里城公園友の会)	首里城公園友の会
首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書 (2010年・海洋博覧会記念公園管理財団)	海洋博覧会記念公園管理財団
新収蔵品展「第13回 (平成17年度分)」「第14回 (平成18年度分)」「第15回 (平成19年度分)」(うるま市立石川歴史民俗資料館)	うるま市立石川歴史民俗資料館
精選八重山古典民謡集 (2) —CD・歌詞 (歌意・解説・語意附) — (2刷 2010年・當山善堂編著)	當山善堂
竹富町竹富島歴史的景観形成地区保存計画書 (2009年・竹富町教育委員会)	竹富町教育委員会
多摩のあゆみ №139 (2010年・たましん歴史・美術館歴史資料室編)	増田昭子
地域研究シリーズ№37 久米島調査報告書2 (2010年・沖縄国際大学南島文化研究所)	沖縄国際大学南島文化研究所
伝統的建造物群保存地区 歴史の町並み 平成22年度版 (2010年・江田修司編)	竹富町教育委員会
中琉歴史関係档案 乾隆期 11-13 (2010年・中国第一歴史档案館編)	財団法人沖縄文化振興会史料編集室
名護市史叢書16 語りつく戦争 第2集 市民の戦時・戦後体験記録 (2010年・名護市教育委員会文化課市史編さん係)	名護市教育委員会文化課市史編さん係
南城市史 総合版 (通史) —佐敷・知念・玉城・大里— (2010年・南城市史編集委員)	南城市教育委員会教育部文化課
南島文化 第32号 (2010年・沖縄国際大学南島文化研究所)	沖縄国際大学南島文化研究所
西原町史 第8巻 資料編7 西原の言語 (2010年・西原町史編集委員会)	西原町教育委員会
博物館企画展 ものづくり今昔 —自然の恵みを活かす— (2010年・沖縄県立博物館・美術館)	沖縄県立博物館・美術館

波照間島の民家と歴史的集落景観—竹富町波照間島伝統的建造物群保存対策調査報告書— (2009年・竹富町教育委員会)	竹富町教育委員会
東恩納博物館展 (平成18年・うるま市立石川歴史民俗資料館)	うるま市立石川歴史民俗資料館
びぶりお 通巻第152号 (2010年・琉球大学附属図書館)	琉球大学附属図書館
ひめゆり—感想文集—第21号 (2010年・ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第45号、46号 (2010年・沖縄県女師・一高ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館) ひめゆり平和祈念資料館	
ひめゆり平和祈念資料館20周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心 (2010年・ひめゆり平和祈念資料館編)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館年報 第21号 (2010年・沖縄県女師・一高ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
復帰記念沖縄特別国体報告書 (1975年・竹富町国体実行委員会)	西里幸晴
ふでの散歩 —三島保夫遺稿集— (昭和56年・三島保夫)	阿佐伊孫良
平和資料展 あれから50年石川ジェット機墜落事故 (2009年・うるま市立石川歴史民俗資料館)	うるま市立石川歴史民俗資料館
法政大学沖縄文化研究所所報第66号 (2010年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
みちかな昆虫たち—恩納の森の生き物—平成21年度恩納村博物館企画展 (2010年・恩納村博物館)	恩納村博物館
宮古島市史資料3 与世山親方宮古島規模帳 (2010年・宮古島市教育委員会文化振興課)	宮古島市教育委員会
宮古島市史資料3付録 近世用語 (2010年・宮古島市教育委員会文化振興課)	宮古島市教育委員会
やいま文庫9 「八重山合衆国」の系譜 (2010年・三木健)	三木健
やいま文庫11 八重山風土記 (2011年・砂川哲雄)	砂川哲雄
八重山探検隊レポート4 八重山の盆 (2010年・八重山探検隊)	八重山探検隊
八重山歴史研究会誌—八重山歴史研究会発足30周年記念号— (2010年・八重山歴史研究会)	八重山歴史研究会
与那国町史第2巻 民俗編 与那国島 —黒潮源流が刻んだ島・どうなん 国境の西を限る世界の、生と死の位相— (2010年・与那国町史編纂委員会事務局編)	与那国町役場
よのつち 浦添市文化部紀要 第6号 (2010年・浦添市教育委員会文化部文化課)	浦添市教育委員会文化部
琉球使節、江戸へ行く！—琉球慶賀使・謝恩使一行2000キロの旅絵巻— (2009年・沖縄県立博物館・美術館)	沖縄県立博物館・美術館
琉大生のための情報リテラシーガイドブック2010 (2010年・琉球大学)	琉球大学
琉球の方言34 (2010年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
琉球八重山方言の言語地理学的な研究 (2010年・研究代表者 高橋俊三)	高橋俊三
わがふるさとへの思い (2010年・黒島精耕)	黒島精耕

竹富町史の刊行物

1、『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 平成2年度 関係機関へ配付

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行財政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。

B5版 ソフトカバー簡易製本 117ページ。

2、『竹富町史』別巻3 写真集 ぱいぬしまじま 平成4年度 ￥2,625

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。92枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319ページ。

3、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅰ 平成5年度 ￥2,100

1898年(明治31)から1918年(大正7)までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41年創刊)の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特値に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684ページ。

4、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅱ 平成6年度 ￥2,100

1917年(大正6)7月から1933年(昭和8)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正6年7月～同15年8月)、「八重山新報」(大正10年2月～昭和8年12月)、「先島朝日新聞」(昭和3年5月～同8年12月)、「八重山民報」(昭和7年1月～同8年12月)の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724ページ

5、『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 平成7年度 ￥3,150

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。

A5版 糸かがり上製本 ケース入り 1,190ページ。

6、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅲ 平成8年度 ￥2,100

1934年(昭和9)2月から1945年(同20)3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和9年2月)、「先島朝日新聞」(昭和9年1月～同15年8月)、「八重山民報」(昭和9年1月～同11年6月)、「海南時報」(昭和10年8月～同20年3月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年2月～同15年11月)六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720ページ。

7、『竹富町制施行50周年記念誌』ばいぬしまじま50 平成10年度 ¥2,625

1948年(昭和23)の町制施行から1998年(平成10)までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議長、町議会議議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目票も掲載してある。A4版 糸かがり上製本 247ページ。

8、『竹富町史』資料集① 鉄田義司日記 平成11年度 ¥1,575

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉(後に中尉・大尉)鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は1941年(昭和16)、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年(昭和20)、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519ページ。

9、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅳ 平成12年度 ¥2,100

1947年(昭和22)1月から1955年(同30)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年1月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年1月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年9月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年7月～同29年1月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年4月～同10月)の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842ページ。

10、『竹富町史』第十巻資料編 近代2 平成13年度 ¥2,625

南嶋民俗資料館(石垣市字大川)が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館(西原町千原)が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年(明治30)に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしがうかがいながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年(明治29)から1907年(同40)までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348ページ。

11、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅴ 平成14年度 ¥2,100

1956年(昭和31)1月から1960年(同35)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年1月～同34年4月)、「八重山タイムス」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和31年1月～同33年3月)の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843ページ。

12、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅵ 平成15年度 ¥2,100

1961年(昭和36)1月から1964年(同39)7月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山毎日新

聞(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年1月～同39年7月)の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大千ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947ページ。

13、『竹富町史』第十巻資料編 近代1 平成16年度 ￥2,625

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記-明治37年以降」、「間切島会二関スル書類-自明治31年至全37年・自明治37年至」、「報告綴-明治37年」、「人頭税領収証綴-自明治31年至明治35年」、「契約及金銭物品二関スル諸証書-自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546ページ。

14、『竹富町史』第十巻資料編 近代3 平成17年度 ￥2,625

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日記」の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年(明治30)から1903年(同36)まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日記 宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月 至全十二月 日記 宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日記だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 600ページ。

15、『竹富町史』第十巻資料編 近代4 平成18年度 ￥2,625

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関わる『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年(明治16)7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に関わる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで十分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の側面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659ページ。

16、『竹富町史』第十巻資料編 近代5 平成20・21年度 ￥2,625

波照間公民館が原本(所在不明)を所蔵していたと思われ、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島庁通達綴 自明治三十五年一月 至三十七年十二月 波照間村事務所」、「波照間島番所日記」(明治二八年～二九年)、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌(第壹部)」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島庁通達綴」が送付された時代は人頭税が幕を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかわる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年(明治28)～1896年(同29)までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年(明治27)～1948年(昭和23)までの学校の沿革を「第壹部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争など強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 434ページ。

※ 竹富町史の刊行物は、石垣市・那覇市・宜野湾市の主な委託販売契約店での販売を行っております。詳細については、竹富町教育委員会総務町史編集課(電話0980-88-7220)までお問い合わせください。

編集後記

◆『竹富町史だより』32号を発刊しました。

本号は、去る二月二十五に開かれた第二十七回町史編集委員会、それに文化シリーズとして「文化財探訪」の「西表島東部の魚垣」、「聖地めぐり」で波照間島の「阿幸侯御嶽」、「写真にみるわが町」では同じく波照間島の「舟漕ぎ儀礼のあるシイシン」、それに「記念碑をたずねて」、「新聞で知る町の今昔」などを取り上げました。特に魚垣が島に残っていることは、文化財に指定してもよさそうなくらい貴重な生活文化を知る財産です。

◆庄巻は、元町史編集委員で県立芸術大学名誉教授（鳩間島出身）の加治工真市氏の寄稿「鳩間島ブル（豊年祭）の構造的意味」だ。内容は、豊年祭の祭祀とタブー、琉球王国と鳩間島、神歌の表現のみるブル、ミルクウタ、カムラーマウタなどの見出しから成り、結語として「村人の立場から村落の豊穰と子孫繁栄の祈願、間得大君の立場から庶民を常楽我浄へ導き、王国の繁栄を予祝する仕掛けとしての豊年祭が主題」としています。

◆今後も機会をみて、「町史だより」に編集委員らの玉稿を載せていきます。ご期待してください。

（通事考作）



平成23年3月31日発行

竹 富 町 史 だ よ り

第 32 号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

☎ 0980 - 82 - 6191